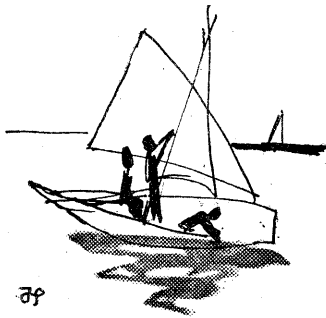


# フレール以後の幼稚園

—(12)—

津 守 真



舟

## 幼稚園と人種問題

二年前の夏にピーボディと幼稚園という題で本誌に幼稚園の歴史の初期の挿話を書いたものを含めると、私の幼稚園史も拙い筆を細々ながらつづけて、今月で十三回目になる。そこで今回は幼稚園の歴史の中の一挿話を記してみようと思う。

人種問題と幼稚園という奇妙な取り合わせであるが、案外関係が濃いのである。「ピーボディと幼稚園」(二昨年八月号所載)の中にも触れたように、米国で始めて幼稚園が創立されたのは、一八六〇年である。この最初の幼稚園が創られた翌年に、米国ではかの記念すべき南北戦争が火ぶたを切った。エリザベス・ピーボディがその始めての試みに忙しく過している間に、巷にはすでに戦の噂が頻々と飛んでいたのである。

南北戦争は周知のように、奴隷を解放し、自由な人間にするために、奴隷制度に反対する北の方の人々と、この制度を守ろうとする南の方の人々との間に、奴隷制度のために起った戦争である。この戦争によって、黒人は白人と等しく扱われるような法律ができるようになり、奴隷制度は廃止されるようになった。とはいえ、先日までしきりに新聞で騒がれていたように、南部の諸州では黒人は日常生活の到る処で差別待遇を受けていたのであるが。しかし人間は、生れつき黒

く生れようが、白く生れようが、その皮膚の色にかかわらず、人間としては同等の価値をもつことが、原理的に確認されたのはこの時がきっかけになっているので、この限りこの南北戦争は普遍的な意義を持っていたのである。

人々の議論が奴隷制度の是非に沸とうしていたとき、エリザベス・ビーボディは奴隷制度反対論者であった。まだ幼稚園運動に乗り出す前のビーボディは、自ら本屋を開いて、知識人、文化人たちの議論を交す社交場をつくり、その女主人として熱弁を知られていたのであるが、黒人を擁護しての彼女の熱心な論じぶりが眼に浮ぶようである。

ビーボディ女史の奴隷制度反対論は純粹に人間的な立場に立つものであった。そもそも此の世に生れてきた人間に、皮膚の色が違おうが、その他もろもろの特性が違おうが、人間の価値として上下の差はあるはずがなく、等しく教育も受けられて然るべきはずである。彼女のこのような純真な考えは人から利用されようとしたこともあった。あるとき、ビーボディ女史の所にアメリカ、インディアンの女が訪ねてきた。アメリカ・インディアンは奴隷ではないが、黒人と同様に蔑視され、差別待遇を受けていた。このことはアメリカの開拓の歴史を見れば直ちに分ることであるが、奥地の森や平原に住ん

でいたアメリカ・インディアンは白人によって征伐されて、次第にもっと奥地へ、不毛の礫地へと追いやられて、すっかり闘争心を失う程に圧迫されてしまったのである。ビーボディ女史はこの白人の横暴を常日頃から憤っていた。外来者である白人が原住民であるインディアンの土地を奪い、原住民がてむかえばこれに闘争を開始してゆくのであるから、その行為に関する限り、それは憎むべきである。このビーボディ女史のところを訪れたアメリカ・インディアンの女を、彼女は懇にもてなし、話をきいた。話はこのインディアンの女が、教育を受ける機会が殆どないインディアンの子どもたちのために学校を創りたい、ついでに寄附をしてほしいということであった。ビーボディ女史は直ちに相当の額の金を与え、毎月寄附することを約束したのである。ところがこのインディアン婦人の話は全くでたらめであった。学校の計画など、どこにもなかった。間もなくそのことがビーボディ女史にも知れたのであるが、彼女はそれを憤りもせず、その後金を送りつづけたということである。現在に至ってもアメリカ・インディアンの保護は十分でないのに、ビーボディ女史が当時であつてこのような問題に目をつけたのは卓見である。

幼稚園が創設されたころは、南北戦争のときであり、人道

的な立場から、人種問題が議せられ始めていた時である。このようなヒューマニズムが漂っていた時期であるから、幼稚園運動が、このような地盤の上に、意外に早く波及していったのであろう。ピーボディ女史の考えをもつてすれば、幼稚園とは、皮膚の色などのようなことには関係なく、人間であるからには誰にでも与えられるものであり、人間の中にある人間性を養ふことがその課題だったのである。

ピーボディ女史の幼稚園には実際には黒人の子どもはいなかったらうと思う。南北戦争がやっと始まった頃では、北部諸州には黒人は殆どいなかったわけである。黒人のための幼稚園を考え、黒人の教師を幼稚園にいれようとした最初の試みは、私の知る限りでは、ブロー女史のセントルイスの幼稚園である。(三月号参照)セントルイスは、現在では米国の中でも人種問題の多い市として知られている。この市では現在まで、黒人と白人との差別待遇が法律的に認められてきた。教育も結婚も、電車の乗り場に至るまで、黒人と白人の間には区別があった。このような市は北部諸州の中には数える程しかないのであるが。現在、このような人種の偏見の強い市において、ここで最初にできた公立幼稚園で、黒人の子どもが対象とせられたということは注目すべきことであると思

う。その後黒人の組がどうなったかはよく知らないが、恐らく黒人の幼稚園は黒人の幼稚園として隔離されてしまったのであろう。結局、この試みは成功しなかったにしても、幼稚園が最初にこの人種問題の解決に乗り出していったということは、むしろ現代よりも先んじてさえたと言えよう。

現在では北部諸州の幼稚園では黒人も白人も差別なく一緒に教育されているのが普通である。幼稚園としては、少くとも黒人と白人と差別待遇をする理由を見出すことはできないのである。もちろん、家庭や近隣社会で人種の偏見の強い地域では幼稚園にもその問題がもちこまれるわけであるが、幼稚園として人種的差別をする理由はどこにも見当らない。幼稚園はどの人間にも等しく関心をもつのであって、単に人種のみでなく、階級も、その他諸々の社会条件をもこえて、どの子どもにも関心をよせるのである。そのことは幼稚園の発展の節々にものぞくことができたのである。その限りにおいて、幼稚園は国際的なものである。幼稚園の教師はこの国の幼稚園にいても、自分の幼稚園の子どもに対すると同じ関心をもつことができるだろうし、どのような皮膚の色、どのような身分の子どもがきても、同等に関心をもつのである。それは幼稚園の歴史の始まりからそうだったのである。